

令和四年四月七日(木)

今月も新型コロナウイルス感染状況に鑑み、
メール句会となった。

大津 そうかい

起重機の動かぬ一日春の雨

残雪や最上階の喫茶室

対向の列車待つ駅遅桜

春灯や客の去りたる露天風呂

担当の子を待つ花壇四月来る

中村 晃也

残雪や大型バスのすれ違い

カウベルや牧舎の陰に残る雪

木の芽風赤く烟ぶれる山毛櫸林

暮れるほど真近に見ゆる花辛夷

病む母にスマホの写真花便り

首藤 しずを

花惜しむ金閣寺(きんかく) 焼きし僧ありき

天翔る駒の雪形妙高山

残り香のそよる尾を引き沈丁花

菜の花や唱歌流るる飯山線

残雪の光となりぬ里鳥

宮原 凧

透明なビニール傘に春の雨

カラスにもユニクロ着せよ春の色

スキップす昔お転婆春うらら

田面の余生も愉し豆の花

上野駅残雪載せて着く列車

志村 良知

残雪に浮かぶ跳ね駒薬師岳

花吹雪踏み跡無しに裏小道

花の雨にホワイトトシチュー昼餉どき

高階に花のひとつひら舞ひ来たり

散る花もただただ楽し子らの群れ

森田 元斐

聖蹟へ一段毎のすみれ草

尊崇の縄文遺跡花吹雪

落ちてなほ矜持崩さず紅椿

白き肌秘めて蓄める紫木蓮

香を孕み垂るる海棠雨の中

高橋 由紀子

春の雨世はコロナ禍と戦乱と

花散らし飛ぶよ青色ロマンスカ

残雪や兎横切るリフト下

絢爛と形見の赤きチューリップ

公園の人工芝の花見かな

浜口 須美子

ないしよないしよ耳そばだてるシクラメン

花馬酔木けんぱけんぱと砂利蹴つて

残雪の海辺にきらりシーグラス

花吹雪爪先軽く一人の道

風呼んで空の青さへ花みもぞ

内藤 まりこ

夕餉時春雷響き箸を止め

見上ぐるは卒業記念花海棠

雪柳八方に伸び自己主張

神田川桜の下を蛇泳ぎ

三連休車の屋根に雪を載せ

長尾 進一郎

残雪の山穏やかや故郷発つ

泣きべそと笑顔のデビュー入園児

山じゅうが示し合はせて桜時

ほろ酔ひの所為なのかしら朧月

おしゃべりに花見る暇みつからず

新田 ゆふき

残雪や代掻き馬の峰白く

残雪にシラネアオイの佐渡遥か

残雪を踏む靴底に流転生む

残雪の滴しぶきて梓川

楊貴妃と助六そぞろ花朧

安藤 晃二

(高校生雪崩事故慰霊祭を観て)

残雪の那須に手向けし花の揺れ

本堂の鳶の見おろす花御堂

春昼の湖に川船遥かなり

昼餉取るガラスの外の花曇

日輪と軽々浮かび花筏

西川 知世

電灯にコードの尻尾花見茶屋

翅音を纏ひ重たし藤の花

春泥の靴の干しあり垣に耳

亀の上の亀に陽当り花の昼

硝煙弾雨菜の花の空の奥

次回は令和四年五月五日(木)、

兼題は大津そうかいさん出題の「立夏」、

席題は西川知世さん出題の「転」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

立夏は二十四節気の一つで暦の上で夏に入る日、
陽暦の五月六日頃に辺り、今年は五月五日です。

傍題に夏立つ、夏に入る、夏来たる、夏かけて、
今朝の夏など。

俳句の季語は陰暦ですから、私が俳句を始めた
25、26 年前のころは、季語と陽暦で生活する
実際の肌感のギャップが今より大きく、俳句は季
節の先取りとかよくわからない説明を受け戸惑
ったことがあります。今は地球の温暖化や気候
変動で、年の前半、夏ごろまでの季語の違和感
年々少なくなってきました。喜ぶべきことでは
なく、少し怖い感じがしますが。夏の季語の数は
一番多く、明るく元気な新しい季語も増えていま
す。戦争のない平和な、ウィルス騒動の収った夏
になることを祈りつつ。

滝おもて雲おし映る立夏かな	飯田蛇笏
機罐車の煙鋭き夏は来ぬ	山口誓子
子に母にましろき花の夏来る	三橋鷹女
溪川の身を揺りて夏来たるなり	飯田龍太
おそるべき君等の乳房夏来る	西東三鬼
明け暮れのひとりに夏の立ちにけり	渡辺桐花
毒消し飲むやわが誌多産の夏来る	中村草田男
プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ	石田波郷
白樺の中より楽や夏来る	岸 風三樓
なかぞらに竹の打ち合ふ立夏かな	正木ゆづ子
ばりばりとシートを開く立夏かな	権 未知子
今日よりの夏立つ海の高うねり	高橋悦男